



会場はコスモすまいる北野。実習生と学生は、他已紹介に向けてお互いのことを伝え合います。実習生の中には日本語が話せる人もいれば日本語の聞き取りに苦戦する人も。それは学生も同じ。それでもある程度の意思疎通はできて、徐々に隔たりを解消していきました



(上)受付でテープに名前を書き、服に貼り付けました。(下)ビートルズの「Let It Be (レットイットビー)」をピアノの伴奏で歌いました



TOPIC

外国人の課題は日本人

【共生社会と文化芸術】



今回のテーマに向き合うきっかけは、昔に取材した人からの電話でした。「昨夜の夜ね、隣の居酒屋で働いている外国人が外で何か叫んでいたの。夜中だし突然で怖かったけど、よく考えると、この人は誰にも言えないつらい気持ちを抱えて、こらえきれなくなったんじゃないかな。私は外国から来た人が、どんな気持ちで暮らしているのか、結局何も知らないなって気付いたの」

「外国人が抱える課題と言うけど、課題は私たちの中にあるのかもしれない」。

久留米シティプラザは良質な文化芸術を届けるためにさまざまな催しを行っています。今、力を入れていく取り組みに、「文化芸術を生かした社会包摂事業」があります。子どもや若者、高齢者、障害者、そして外国人など、各々の違いをそのまま受け入れる社会に近づけるのに、演劇など文化芸術の力を生かそうというものです。

令和5年4月、「北野町で会いましょう」というプログラムが始まりました。歌やダンスを外国人と日本人と一緒に楽しみ、出会いやコミュニケーションのきっかけにします。担当の宮崎麻子さん(久留米シティプラザ事業制作課)は「人の意識や行動は簡単に変わらない。だから3年計画で地道に」と話します。

課題は「接点を見い出せない」

準備は令和4年度から。企画のために、農業の技能実習生が多く暮らす北野町で聞き取り調査を行いました。フリーピン出身が多く、日常的に歌やダンスに親しんでいることも分かりました。そこからプログラムの内容を決定。「開催は作業が休みの日曜。買い物にも出かけるそうなので時間は1時間に。終わった後の交流の時間を大切にしました」。調査で課題も見えてきました。外国人との

接点を見いだせない地元住民の現状と、その外国人の皆さんの孤立です。「顔合わせの時、日本人は名前を言うんですが、『こちらが実習生の皆さんです』と一括りに紹介されることも。一人一人、名前で呼ばれないと、個人の認識は生まれにくい。この辺に外国人の暮らしにくさの根っこがあるような」と宮崎さんは感じています。

接してみると意外と話せる

6月18日に開かれたプログラムの「うた編」には、実習生13人、久留米大学の学生11人が参加しました。進行は、劇作家・演出家の穴迫信一さんと俳優・音楽家のかみもと千春さんです。進行は英語と日本語で説明。参加者同士が打ち解けるため、1時間のうち50分をレクリエーションに使いました。誕生日順に一列になったり、好きな食べ物や季節でグループに分かれたり。英語や日本語、身振りも交えてコミュニケーションを取り合いました。

休憩後、実習生と学生がペアになり、名前、年齢、好きな食べ物などを伝え合いました。みんなの前でペアごとに相方を紹介。ユニークな紹介には笑いが起こっていました。最後に全員で合唱。参加者の多くが隣の人と笑顔を交わしながら歌っていました。穴迫さんは「コミュニケーションの壁を下げるのは、感覚的に日本人の方が時間がかかるような気が



しばらくは実習生と学生に分かれていましたが、徐々に境界はあいまいに。日本人同士でも打ち解けるのに時間がかかると言います。「外国人とだからというわけでもなさそうです」と穴迫さん

がします」。

参加した学生の一人は、会場に来るまで緊張していたと打ち明けました。「コンビニで外国人を見かけても、話すこともないし」。普段関わる機会の無さがあらわに。しかし、ものの1時間でスマホで自撮りをして、「食事に来てって言われた」「インスタでつながった」など友達のように会話が弾みました。「意外に普通に話せるって分かって、そこから楽しくなりました」。

話さなくても「想像し合える」

6月25日のプログラムは「ダンス編」。実習生14人、学生7人。はじめは一人一人が



担当の宮崎さん(中央)。現状では災害時に情報が十分に伝わらない可能性があります。それでも、実習生本人たちは仲間とのコミュニティで日常が完結するので「意外と困り感はないと言っている人もいました」と宮崎さんは話します。避難所に来る外国人の少なさにも課題の一端が。「やはり十分に包摂(包み込むこと)されていないと思います」